



高知県立坂本龍馬記念館

The Sakamoto Ryoma Memorial Museum



海援隊旗(二匁きの旗)

ryoma@ryoma-kinenkan.jp

一葉 ICHIYOU CHISHUU 知秋

特別企画展「土佐ゆかりの刀剣」

会期：令和8年10月10日(土)～令和8年12月6日(日)

令和8(2026)年は、廃刀令から150年という節目の年になる。廃刀令は、士族の象徴であった帯刀を禁ずるもので、これまでの特権を奪われてきた士族にとって、心の抛り所まで奪われることとなった。そして翌年、最後の士族の反乱である西南戦争を経て、日本は本格的に近代国家へと進んでいく。

本展は、刀好きな龍馬の一面や土佐の刀工が鍛えた刀剣、幕末土佐藩の人々が持っていた土佐ゆかりの刀剣を紹介するとともに、武士にとって刀はどういう意味を持っていたのかをお伝えする。

また、本展は令和8年に高知県で開催される第41回国民文化祭、第26回障害者芸術・文化祭「よさこい高知文化祭2026」(開催期間：令和8年10月25日～12月6日)の関連企画でもある。

【主な展示資料】

① C. SMITH & SON

《サーベル形儀仗刀》後藤参二郎拝領

(静嘉堂文庫美術館所蔵)



このサーベルは、後藤参二郎が英国のヴィクトリア女王から拝領したものだ。慶応4(1868)年2月30日、英仏蘭の公使たちが、京都で天皇に拝謁するため、各宿舎から御所をめざしていた。英国公使ハリー・パークスは、知恩院を出て三条大橋手前に差し掛かったところを2人の暴漢に襲われた。それを中井弘(薩摩藩)と後藤が防ぎ、二人は英国王室からサーベルを拝領した。

② 『英仏蘭三公使参朝記聞』

(外務省外交史料館所蔵)

本史料には、パークス襲撃事件の顚末が詳細に記録されている。この事件は、幕末維新期最後の攘夷といわれる。

③ 龍馬の刀2振

・備前長船勝光・宗光(当館所蔵)

・龍馬が幼い頃から愛した脇差

・左行秀(個人所蔵)



龍馬の兄・権平が近所に住んでいた左行秀に頼んで作ってもらった刀。龍馬の佩刀となり、後に友人の甲斐馬太郎の甲冑と交換した。左行秀は、新々刀期(江戸時代後期～幕末)の中では、全国でも指折りの刀工。

④ 幕末の土佐を代表する刀工

・中島氏詮4振(個人所蔵)
・朝尊(太刀・脇差)(個人所蔵)
写真は脇差



⑤ 紫虹子寿秀2振(個人所蔵)

・その他資料

・陸奥守吉行(脇差)(個人所蔵)



・錦絵「士族の商法」

・「人民平均の理」

・「徴兵令参考」

明治維新を迎え、日本は近代国家へと進み始めた中で、これまでの身分制度を改め、四民平等へと移行していく。明治4(1871)年の「散髪脱刀令」、同6年の「徴兵令」、同9年3月の「帯刀禁止令」いわゆる廃刀令、同年8月の「秩禄処分」を経て、元武士たち士族の特権やアイデンティティーが次々と奪われていった。こうした政策に反発して、士族の反乱が繰り返され、同10年の西南戦争で終結する。

こうした中、高知藩では全国に先駆けて明治3年12月に、福岡孝弟が中心となって「人民平均の理」を布告した。武士の特権を放棄し、四民平等を謳ったこの政策は、支配者階級だった士族から出たもので、のちの自由民権運動に直結するものではないが、土佐らしい画期的な政策だった。

三浦 夏樹

「幕末行列」展のふりかえり ― 展示の多様な楽しみ方 ―

7月4日から始まり、8月31日に幕を下ろした本展。2カ月弱という会期の中で、「終日」兩模様だったのはたったの2日間だけらしく、この情報だけでも高知の夏の様子がよくわかります。

土佐藩で最後の藩主となった山内豊範が参勤のために高知を出発した文久2（1862）年6月28日は、幕末の頃の日本の暦でいうとぎりぎり夏といったところ。江戸時代では、1月～3月が春、4月～6月が夏、7月～9月が秋、そして10月～12月が冬とされており、つまり、豊範が高知城を出たのは夏の終わりごろ、一行が麻疹に悩まされた7月は秋の初め、朝廷の命を背負って江戸へ向かうために京都を発った10月は冬の初めでした。

「当時の季節を意識する」という視点は案外大切なもので、たとえば、過ごしやすい春や秋の時期に旅をするのと、真夏あるいは真冬に旅をするのでは、当然こちら側の心持ちが変わってきます。小学生の頃、修学旅行で秋の京都に行った私が、これくらいの季節が一番旅に適

しているなと思ったくらいなので、当時の人々にとっても「いつ旅をするか」という視点はそれなりに大事だったのではないのでしょうか。実際、和宮の降嫁時期の交渉で季節の問題が取り上げられているのです。

後期に展示をした重要文化財5点のうち、万延元（1860）年10月5日付の「孝明天皇宸翰写」に、この問題が具体的に見られます。孝明天皇は和宮とは異母兄妹であり、外国船がよいよ頻繁に渡来するようになった弘化年間に即位した人物です。本史料は降嫁の時期についての考えを孝明天皇が自ら幕府側に伝えた書状の写しで、その内容からは孝明天皇の並々ならぬ想いが伝わってきます。

「幕府側が示している降嫁の時期は」寒さが厳しく雪も深い頃であることを案じており、寒さが体に障ってしまえば和宮自身が気の毒であることはもちろん、和宮の実父である仁孝天皇（弘化3（1846）年没）に対しても申し訳ない」

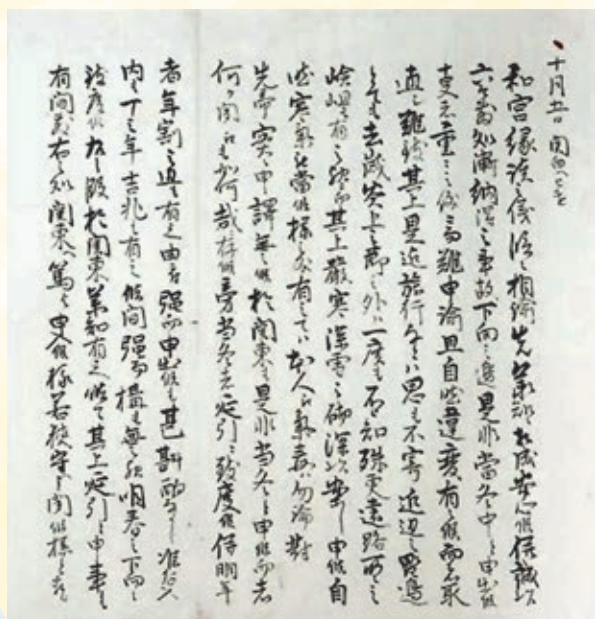
幕府側は当初、10月～12月の間、要するに当時は冬に当たる時期を提案していました。しかし、孝明天皇はこのように案じていたため、結

果的に幕府側は翌年の春を折衷案として提示します。旅をする上で季節が考慮されていた事例です。ただし、その後には起きた不和から降嫁のタイミングはさらに後ろ倒しとなり、実際に和宮が発したのは翌年の10月中旬。これから冬にさしかかる、厳寒・深雪の時期となっていました。

さて、ここで冒頭で話した豊範の参勤に戻るわけですが、一行が四国山地を越えたのは夏から秋にさしかかる季節の変わり目の時期です。現代の我々でも季節の変わり目は風邪をひきやすく、ましてや豊範一行はフルマラソンの距離を連日歩き続け、険しい峠を越えていたわけなので、体に障らない方が不思議なくらいです。豊範含め、お供をした人々の大半が麻疹に罹ってしまったのも無理もないことなのかもしれま

せん。

このように考えてみると、歴史の人物は遠い過去を生きているように見えて、現代に生きる我々に通じる部分があるように思えます。本展から派生して、ここでは季節の話を取り上げましたが、受け取り側によって見つけられる共通点は多種多様です。本展では古文書や工芸品、染織品など様々な資料を展示しましたが、これらを眺め、十人十色の楽しみ方ができる展示になっています。上村 香乃



孝明天皇宸翰写 京都市歴史資料館所蔵

今秋の特別展

高温多湿の高知独特の「酷暑」シーズンを経て、夜長に気づく10月がスタートしました。

本年度は、4つの企画展と2つの収蔵品展を催す計画を立て、まず上半期の4月と7月からはそれぞれ、「武士社会における名前」と「幕末行列」をテーマとする2つの企画展を主催しました。

当館の若手学芸員が手がけた各企画展では、武家が名乗る複数の名前の由緒や流儀とその奥深さや、若き將軍と皇女の幕末の政局收拾のための縁組みという国策を巡る二人の歴史的行列の使命や懊悩などを紹介しました。両展ともに、県内外の公益財団法人や博物館等から第一級の展示品を借用するなど様々なご支援を賜り、おかげさまで4月から8月までの入館者数の累計は58千人余り（昨年度同期比11%増）と、数多くの方々のご観覧を得て、共感をいただくことができました。

9月8日から開催中の「幕末維新期の文化」をテーマとする収蔵品展の満了後は、特別の企画展である「土佐ゆかりの刀剣」展にスイッチいたします。

同展においても県内外の博物館や

個人コレクション等と連携し、龍馬の佩刀や土佐の刀工ゆかりの刀剣、さらには後藤象二郎が英国女王より拝領した洋剣をはじめ、それらにまつわる逸話や刀ネタの龍馬直筆の書簡などもご紹介します。

龍馬は、慶応2（1866）年12月4日、兄・権平に、「国難に臨む者には、家宝の甲か刀を分け与える」と聞くので、何かいただかせんか」と頼んでいました。翌年2月、兄・権平は家宝の刀を選び、なんと土佐に来ていた西郷隆盛にその刀「吉行」をこつげます。京都の刀剣家にもその名刀をほめられました。同展で出展する慶応3（1867）年6月24日付け兄・権平宛ての直筆の書簡にそう綴られています。

今秋の特別展の開催期間は、10月10日から12月6日までの58日間です。「よさこい高知文化祭2026」の関連企画との位置付けもしています。このように、下半期においても話題性のある尖った企画を押し出してみたいと思いますので、どうぞご期待ください。



土佐ゆかりの刀剣

幕末維新期の文化



新職員紹介



副館長 谷脇 淑代

みなさま、こんにちは。7月1日より坂本龍馬記念館で勤務しております、谷脇と申します。このたびご縁をいただき働く機会を賜りました。知識や経験などまだ力が足りていないことを痛感する日々ですが、坂本龍馬をはじめ幕末の歴史についてたくさん学べるのが大変うれしく、職場に通うことが毎日とても楽しみです。

県内外のみなさまに、「一度は行きたい」「また訪れたい」と思ってもらえるよう、館長をはじめ経験豊富な職員とともに懸命に努めてまいります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

秋の特別チケットのご紹介

「龍馬に大接近」セット券を販売中！

毎年秋に桂浜公園の坂本龍馬像で行われている「龍馬に大接近」。高さ約13.5メートルの坂本龍馬像の隣に同じくらいの高さのやぐらをたてて、龍馬像と同じ目線で太平洋を見ることができる、大人気のイベントです。期間中は、「龍馬に大接近」と当館の見学をセットでお楽しみいただける、お得なチケットを販売します。セット券を購入いただくと、200円お安く、両施設をお楽しみいただけます。

- 販売期間：令和8年9月12日（土）～11月23日（月・祝）
- 販売価格：900円（税込）
当日券のみで各種割引は対象外です
- 販売場所：桂浜龍馬像特設展望台「龍馬に大接近」入場口
高知県立坂本龍馬記念館 入館受付
- 販売時間：両場所とも営業開始から16：00まで



「土佐ゆかりの刀剣」展 オリジナルグッズ付きチケットを発売！

特別展「土佐ゆかりの刀剣」展の開催にあわせて、オリジナルグッズ付きチケットを発売します。本展のために制作したオリジナルグッズは、刀の鐔をイメージした木製コースターです。全4種類のなかから、どの絵柄が当たるのかも楽しんでいただけますと幸いです。当館ミュージアムショップでは、木製コースター単品の販売もいたします。

- 販売期間：令和8年10月10日（土）～12月6日（日）
- 販売価格：1,500円（税込）**枚数限定。無くなり次第終了** 当日券のみで各種割引は対象外です
- 販売場所：高知県立坂本龍馬記念館 入館受付
※コースターは全4種類のうち1種。お楽しみ企画で種類はお選びいただけません。
※本館1階ミュージアムショップでは、木製コースターのみを1個1,000円（税込）で販売いたします。
こちらは好きな絵柄をお選びいただけます。



※コースターの画像はイメージです

今年の11月15日で当館は開館35年を迎えます。こうして無事に節目を迎えられるのも、ひとえに皆様の温かいご支援とご愛顧の賜物と、深く感謝申しあげます。11月は「龍馬月間」と題して、様々なイベントを予定しております。この節目の機会に、皆さまにお会いできることを楽しみにしております。

竹田 綾

令和七年度企画展「郷土坂本家の秘蔵」展 記念講演会

「坂本龍馬と坂本家・その後」

坂本家十代当主 坂本 匡弘 氏

私は龍馬の兄・権平の直系子孫にあたる郷土坂本家十代目当主である。

講演ではまず、坂本家と新選組局長・近藤勇の意外な縁を紹介した。近藤勇の養父・近藤周斎はもと島崎家の三男であり、周斎の兄の子孫が私の妻であるという系譜を紹介した。

私は東海大学出身であるが、東海大学つながりで、大久保利通・西郷隆盛・坂本龍馬という幕末三名の子孫がいずれも同大学出身であるというエピソードも披露した。

龍馬自身の生涯を辿りながら、幼少期は病弱で泣き虫であったが、十二歳で楠山塾に入門した際には上士の生徒との衝突があったこと、父の後妻・伊予の実家川島家を通じて海外の品々に触れたことなどのエピソードを紹介した。剣術修行では十四歳で日根野道場に入門し、十九歳で免許皆伝、江戸では千葉定吉の小千葉道場に学び、北辰一刀流兵法皆伝を得ていたことが、坂本家に伝わる預かり証などの史料から改めて確認されたことを紹介。

さらに、勝海舟門下時代の逸話として、龍馬と親交のあった安藤太郎の回想録『安藤太郎文集』を紹介し、龍馬は酒を愛したものの、勝海舟への遠慮から節度を保って勝先生がいるときには飲まないという人物像が示されていることを紹介。長崎では豪商・小曾根乾堂による支援、伏見では三吉慎蔵に救われた寺田屋の場面、亀山社中の練習船ワイルウエフ号の遭難と慰霊碑の逸話、第二次長州征伐での従軍と自筆の海戦図など、坂本家に伝わる史料に基づく具体的なエピソードを紹介した。暗殺

五日前に福井藩士・中根雪江に宛てた書簡には「新国家」の語が確認され、龍馬が最期まで新政府樹立に情熱を注いでいたことを物語る史料として紹介した。

なお坂本家の出自については、口伝として明智光秀の一族に連なるとする説と、紀貫之の子孫であるとする説の二つがあり、家紋「組み合わせ柶に桔梗」が光秀の「桔梗紋」に通じる点、天保九年に坂本家が土佐藩庁へ提出した「先祖書」に紀氏の記述が加えられている点など、口伝による考察を示した。

講演の後半は、龍馬没後の坂本家の歩みを辿り、龍馬の兄・権平の系譜を継ぐ郷土坂本家は、五代目・坂本直寛の代に北海道開拓へと乗り出す。龍馬の甥である坂本直寛は同志と北光社を設立して北見の開拓に着手、後に浦臼へ移住し開拓と牧師をおこないキリスト教伝道に生涯を捧げた。六代目・直道は満鉄勤務にてパリに駐在し、松岡洋右の随員や吉田茂・鳩山一郎との交流を通じて日米関係の改善に奔走した国際人であったこと。七代目・弥太郎は釧路・札幌で事業を興す一方、大火で焼失を免れた龍馬の遺品を京都国立博物館に寄贈し、現在は国の重要文化財に指定されていること。八代目・直行は山岳画家として北海道の自然を描き続け、九代目・登を経て、私は十代目、十一代目龍哉へと家系は続いていることを紹介した。

こうした系譜の中には、直道の娘である寿美子は、フィギュアスケートで幻となった一九四〇年札幌オリンピックのフランス代表候補であったことも紹介した。

北海道の登山用具製作で知られる「札幌

幌門田」の創業者・門田直馬も、もとは土佐で甲冑を手掛けた職人で、坂本家とともに北海道へ移住した縁のエピソードも紹介した。

坂本家には現在も勝海舟や西郷隆盛の書、龍馬自筆の長幕海戦図、東郷平八郎の書による龍馬肖像画などの史料が伝わっている。最後に、「龍馬は自由・平等の世を目指し、日本を一つの国として海外交易を実現しようとした。坂本家はその行動を家族で支え、遺志を継いで北へ渡り、時の政治を陰で支えてきた」と結び、講演を終えた。



坂本氏ご講演の様子

令和八年度企画展「武家社会における名前」展 記念講演会

「近世武士たちの名前 —近世後期の人名常識—」

京都華頂大学日本文化学部 准教授 尾脇 秀和 氏

本講演では、江戸時代後期における武士たちの名前の実態、それらをめぐる文化・慣習についてご紹介したい。それらを理解する際に重要なことは、現代の常識を離れるということである。例えば、現代人にとって名前は「かけがえのないもの」という認識があるが、江戸時代には改名が日常的な慣習として行われており、人々は人生の節目や社会的地位の変化に応じて何度も名前を変えていた。そのため、名前は個人のアイデンティティというより、社会的立場や役割を示すものとして機能していたのである。

まず取り上げるのは、「改名習俗」である。改名には大きく分けて二つのパターンがある。一つは元服に際して、幼名から成人名に改めるといったような通過儀礼的な改名である。もう一つは家督相続や隠居、商家における独立など、身分の変化に伴う改名である。江戸時代には身分移動がかなりみられ、町人から武士になる、あるいは武士を辞めて町人となる場合にも、それぞれの身分にあわしい名前へと改めた。改名習俗の背景には、名前が職業や社会的地位を示す重要な標識であったという事情がある。さらに、名前には「名跡」として家や権利と結びつき継承される性格もあった。現在の歌舞伎や相撲年寄における名跡はその名残である。

具体例として、町人出身から幕臣となった近藤三左衛門の事例を紹介したい。彼は但馬生野の掛屋藤本市兵衛の倅・芳太郎として生を受け、のちに幕領代官所手代の名跡を相続して小林再助となった。さらに、譜代御家人中村家の四男という体裁をとって中村慶助となり、続いて同じく御家人である近藤与四郎の養子となって近藤慶助と名乗る。その後も通称を与六、三左衛門と改名しており、人生の中で六種類もの名前を用いたことになる。この事例は、江戸時代には改名が例外ではなく、身分の変化に応じた当然の

慣習であったことをよく示している。

続いて、武士の名前の実情について解説したい。基本的に武士の名前は、イエの名である「苗字」と個人名である「通称」から構成され、日常生活では「三左衛門殿」のように通称で呼び合うのが一般的であった。通称はさらに、「一般通称」「疑似官名」「正式な官名」の三種類に分類できる。一般通称は「〇左衛門」「△三郎」など、あらゆる身分の男性名として見られる最も普通の形である。疑似官名は「近江」「隼人」、あるいは「〇馬」などの、官名から派生・増殖したものである。一般通称と正式な官名との中間に位置する格式の名前といえる。正式な官名は「土佐守」「掃部頭」のように、朝廷の官職名であり（ただし官職としての実態は喪失）、將軍から諸大夫の格式を許された大名と一部の旗本のみが名乗った。これらは単なる呼称ではなく、武家社会の身分秩序を可視化する役割を果たしていた。

これらに加えて、「忠相」「宣以」といった、「実名」「諱」「名乗」などと呼ばれるもう一つ別の要素が存在していた。名乗は主として、正式な書状への署名や印章に用いられるくらいで、日常生活における人名としての役割はほとんどなかったのが実態である。名乗も改名されることがあったが、それが公的に把握されることはなかった。したがって、江戸時代の武士にとって「名前」とはあくまで「苗字＋通称」であり、名乗は補助的な要素にすぎなかったのである。名乗の慣習として、通字（家において継承される特定の字）や偏諱（主君からの一字拝領）といったものがあつた。

ただし、歴史的経緯からすれば、名乗（実名・諱）こそ「実の名」であった。古代には「姓＋名」（例…平朝臣清盛）が人名として機能していたが、古代末から中世にかけて通称の使用が始まり、やがてそれらを修飾する苗字が登場したことで、「苗字＋通称」を人名とする常識が定着して

いった。人名における主客の転倒現象ともいえようか。

最後に、明治初年の「氏名」誕生についてご紹介したい。新政府は王政復古の理念のもと、従来の通称や官職名を廃止し、本来の実名を用いる制度へ戻そうとした。しかし、江戸時代の複雑な人名慣習との間に大きな混乱が生じる結果となった。明治四年（一八七二）、古代方式による氏・姓の公用が禁止されたことに続き、翌五年（一八七三）、通称と名乗の併用が禁止された。これによって苗字を「氏」として唯一の「名」（個人名）を有する近代的な氏名制度が成立した。現在の私たちが用いている氏名は、この改革の結果として生まれたものであり、江戸時代の武士の名前とは根本的に異なるものなのである。以上でみてきたように、改名習俗や社会的地位を示す役割、通称と名乗の存在など、江戸時代の武家社会における名前の様相は非常に複雑である。それらを「異文化」として捉え、理解することによって、近世武家社会の実像をより深く把握することができるであろう。



尾脇氏ご講演の様子

総会・研究発表会

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会は六月二〇日、坂本龍馬記念館新館ホールにおいて、第一八回総会・研究発表会を開催した。

昨年同様、総会では書面決議が行われ、昨年度事業報告、今年度事業計画、役員案とも承認された。

その後、第一部・第二部の記念講演会・研究発表会では二名の研究者の方にご登壇いただいた。いずれもこれまでの調査・研究に基づいた興味深いご報告で、盛会のうちに今年度総会・研究発表会は閉幕した。



総会の様子

【テーマ】「龍馬研究の水準を高め、龍馬の真実を追究し、その精神を現代に生かそう」

【日時】

二〇二六年六月二〇日(土)

一二時三〇分～一七時

【会場】

高知県立坂本龍馬記念館 新館ホール

【当日次第】

〇一二時三〇分

・会員受付・入室

〇一二時四〇分

・総会(書面決議報告)

〇一三時一五分

・会長挨拶

・来賓挨拶

高知県教育長 今城 純子氏

高知市教育長 永野 隆史氏

〇一三時三〇分

・第一部 企画展「武家社会における名前」展 記念講演会

「近世武士たちの名前―近世後期の人名常識―」

尾脇 秀和氏(京都華頂大学日本文学部准教授)

〇一五時

・第二部 研究発表会

「龍馬伝をクリーニングする」勝海舟入門前後」

知野 文哉氏(坂本龍馬研究家)

【総会書面決議のご報告】

二〇二六年度の事業計画や予算等の総会審議事項については、事前に書面決議を行いました。その結果は次の通りです。

以上により規約第九条(議決)に基づき、すべての議案について、過半数の承認をもって可決されましたことをご報告いたします。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会

第一八回 高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会第二部 研究発表会

「龍馬伝をクリーニングする」 勝海舟入門前後」

坂本龍馬研究家 知野 文哉氏

本報告は、勝海舟への入門前後の坂本龍馬の史料をいま一度精査し、この時期の龍馬の動向と思想を再確認するとともに、勝への入門が龍馬にとってどのような意味をもったのかという点を考察するものである。萩藩の久坂玄瑞の「草莽崛起論」に感化され脱藩したはずの龍馬が、なぜ「開国派」の勝に弟子入りしたのか。本当に勝を斬りに行き、その場で勝に論破されたのか。こうした疑問を出発点に、考察を進めていきたい。

土佐脱藩後、江戸へ出た龍馬は、文久二年(一八六二)秋以降、土佐勤王黨員である間崎滄浪と行動を共にする。龍馬はこの時期、間崎の思想や人脈の中にい

たと推測されるが、間崎は、勅許を得ない通商条約は即時に破棄し、それに伴う対外戦争も辞さないとする「即時攘夷」派に与しており、龍馬も、高杉晋作や久坂玄瑞らの萩藩激派や、間崎と親しい清河八郎の一派らと接触を続けていた。龍馬が、同年十一月の高杉らの外国行使襲撃計画に賛同していたという史料も残っており、龍馬の勝への入門を同年の一〇月頃のこととする芸州藩の木原適処の回顧に従えば、勝への入門は即時攘夷からの脱却、ではなかったことになる。

龍馬と勝との出会いについては、松平春嶽が、勝への紹介状を与えたとも言われており、これは後年の春嶽の回想談に

由来している。ただ春嶽の回想で語られている事柄の殆どは伝聞情報で、また春嶽自身の体験部分にも日時や人物の錯誤が見られるなど、史料としての有用性に難がある。勝自身も春嶽の紹介状には触れておらず、春嶽が龍馬に勝を紹介したとは断言できない。

後に勝は龍馬について、「おれを殺しに来た奴だ」と語っている。当時勝が志向していたのは、現状の通商条約を容認し、国力を養成した上で攘夷を行う「未来攘夷」論であったが、龍馬は即時攘夷勢力に与っていたから、その点、勝の談話には信びよう性があるようにも思える。一方、即時攘夷派の中には、一旦攘夷を行った後の主体的開国を肯定する意見もあり、間崎も、対外貿易を行い、その利益で海軍を興し、国力を養成するという未来攘夷とも共通する富国強兵の考えに理解があった。

先に述べたように、この時期の龍馬は間崎と思想軸を共にしていたと思われるし、龍馬の周辺には勝を知る人間が複数いたから、龍馬が勝との面会以前に、勝の情報を得ることも難しくなかった。龍馬が勝入門以降も即時攘夷論を捨てていなかったと思われることなどからも、勝を斬りに行った龍馬が、勝に論破されて弟子入りしたとは考えにくい。龍馬の勝入門の目的は、攘夷後の対外貿易や海軍振興に備えて、航海術の修業を行うことであつた、と考えておきたい。

そして龍馬は、文久三年（一八六三）三月頃、勝の盟友であつた大久保一翁と面会する。大久保は龍馬を「真の大丈夫」と評価し、朝廷が攘夷を主張し続けた場合には、徳川家は政権を朝廷に奉還し、一諸侯の列に下るべしという大政奉還論Ⅱ「大開国論」を語る。報告者は、この大久保の「大開国論」に触れたことが、龍馬の重要な思想的転換点になったと考えている。

勝へ入門した龍馬は、航海術の修業と

併せて、勝の政治活動のアシスタントを務める。その中で、龍馬は次第に未来攘夷論への理解を深めていったと考えられるが、まさにそのタイミングで、「大開国論」という、幕府を超越する政体構想に触れたのだ。龍馬は、「大開国論」に賛同し、自らその周旋を担うことを希望する。「大開国論」という明確な思想軸を手に入れたことで、龍馬は、即時攘夷論や勝のアシスタントという立場から脱却し、独立したひとりの志士——「大開国論」の同志として動き出す。

龍馬は、その後、「大開国論」の人脉を軸に、横井小楠以下、三岡八郎、村田己三郎ら越前福井藩の文久改革派と手を携え、越前福井藩の挙藩上洛計画に向けて尽力することになる。「日本を今一度せんたくいたし申候」（文久三年六月二九日付乙女宛龍馬書簡）という龍馬の言葉は、こうした思想の上に立った、大開国派による幕府改革への志向であつたと報告者は考えている。

以上本報告では、勝への入門は、龍馬にとって「即時攘夷」から「未来攘夷」「大開国論」への重要な思想的転機となったと結論付けたい。大政奉還論（大条理プラン）、蝦夷地・竹島開拓構想、海援隊構想など、この後の龍馬の活動は、勝への入門で得た思想軸を起点に展開することになるのである。



知野氏ご講演の様子

こぼれ話 — 犬歩棒当記（五十七） — 薩長同盟とは薩長謀反である

宮川 禎一

西日本人が「薩長同盟」と聞けば「坂本龍馬らの仲介のお陰で仲たがいでいた薩摩藩と長州藩が和解して両藩協力して明治維新が来りて日本が封建社会を脱して比較的自由な近代国家となつて良かったね」となる。司馬遼太郎の小説『竜馬がゆく』がその立場だ。

しかし福島県会津若松市の人

がそれを聞けば「はあ？何を言っているのか。徳川様を倒すなどという極悪同盟の成立を『良かったね』などと言うな」と思う人が居るだろう。東日本の書店ではそんな内容の幕末本が売られているはずだ。

慶応二年の一月下旬に京都で開催された薩長会合は幕府にとつても重大だ。見過ごすことはできない。城郭の石垣修理など些細なことでも幕閣への届け出が必要だ。幕府の許可無しに修理すれば減封改易の口実となる。ましてや外様大名の重役同士が密談するなど「徳川家への反逆の謀議だ」と受け取られるに決まっている。桂小五郎をひそかに京都に迎え入れた薩摩藩も「幕府からそう思われること」を覚悟して会談に臨んだはずだ。

関ヶ原の残党であり西国雄藩である島津家と毛利家の重役ど

もが「何事かコソコソと会議していること自体が謀反」だ。高杉晋作ら過激な尊攘派が再び実権を掌握した長州藩は危険だ。薩摩藩がそれに接近するのはもつとまずい。京都所司代も伏見奉行所も敏感になって当然だ。薩長合意の「六箇条」よりもさらに危ない話をしたかも知れないではないか。

慶応二年の四月頃、老中板倉勝静は（この薩長会議の事を知ったうえで）大坂城に大久保一蔵を呼び出して薩摩藩を幕府側に引き戻そうと必死に説得した。しかし第二次長州征伐に大反対する大久保の弁舌にやり込められている。長州藩が幕府に敗北したら次は薩摩藩の番だからだ。謀反する側も（新しい日本のためというよりも）自藩の生き残りに必死だったのだ。



薩長会議が行われた「小松帯刀寓居跡」石碑。（京都市上京区森之木町）

龍馬の手紙

31

龍馬の書を比べて

筆者は「龍馬の手紙15」で宮内庁書陵部図書寮文庫蔵「薩長同盟裏書」(以下『裏書』)を取り上げたが、改めて、同時期、同条件下で書かれた他の書状と比べることで、その書きぶりについて触れてみたい。

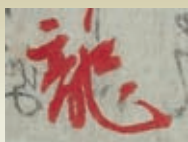
図版一と二は『裏書』から、図版三と四は別に同文庫蔵の坂本龍馬書状(以下『書状』)からの引用。『裏書』は、慶応二年(一八六六)二月五日付で、薩長同盟の内容に相違ない旨を記し、『書状』は翌六日付で、主に寺田屋事件の様子を記したものである。『書状』には、襲撃に際しての応戦で高杉晋作から贈られた「ピストル(ピストル)」の三発目を撃った時、その手を斬られたとあり、内容を御存知の方も多いかもしれない。この二通は、同時期、同じ相手

(木戸孝允)宛の書状ということで、ほぼ同一条件下、寺田屋事件により「唯今ハ其手きす養生中」で、傷が完治していない中で書かれたものである。

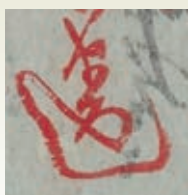
『書状』は署名も含めて草書が多いのに対し、『裏書』は行書が主体である。龍馬の他の書状も草書が多く、行書主体の、やや改まった雰囲気を持つ『裏書』の筆致は目に留まる。『書状』のしんによる図版四のように止めるか連綿となっており、他の書状でもこのような収筆が多い一方で、上にハネ上げる『裏書』の形は特徴的とも言える(図版二)。『裏書』の署名(図版一)も『書状』(図版三)とは対照的であり、薩長同盟について言及する、龍馬の気持ちが出たような書きぶりとなつてあらわれたと見えられなくもなく、気持ちのほどが見て取れるような気がするのには私だけであろうか。(書名はいずれも『木戸家文書』(函架番号F1・5)の内、『裏書』は天47『書状』は人226。画像は宮内庁HP「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」で公開されている。)

田代 圭一
(宮内庁書陵部図書寮文庫首席研究員)

図版一



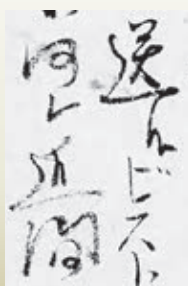
図版二



図版三



図版四



龍馬館の あの日 あの時 あの間



龍馬館の歴史や普段見ることがない龍馬館の一面を写真とともにご紹介するコーナーです。No.9

■ 土佐弁特別音声ガイド

坂本龍馬生誕190年を記念し、令和7年9月20日～令和8年3月31日まで土佐弁特別音声ガイドを実施しました。常設展示室「坂本龍馬の生涯と幕末」の展示資料から厳選した資料を龍馬の目線で紹介し、ナレーションに土佐弁を用いることで、まるで龍馬が隣にいて解説をしてくれるような気持ちで展示をご覧いただける音声ガイドです。

昨年度は比較的女性のお客様のご利用が多く、そのほとんどがオレンジ色のお洋服やアクセサリ等を身に着けて来館されていました。ナレーションを務めてくださった俳優・田村心さんが演じる、舞台「刀剣乱舞」の陸奥守吉行のイメージカラーがオレンジであることから「推し活」としてご来館いただいていたようです。

音声ガイドを何周も聞いてくださる方や、ご持参の「刀剣乱舞」の陸奥守吉行のぬいぐるみと展示資料の陸奥守吉行を並べて撮られる方など、皆様が思い思いに楽しん

でくださる様子が印象に残っています。また、アンケートには「音声ガイドがとても良かったのでまた聞きにきます」といった嬉しいお声も寄せられ、多くの方に喜んでいただけたことが私にとっても大きな喜びとなりました。

ご好評につき土佐弁特別音声ガイドは令和8年7月1日～令和8年12月31日までリバイバル実施中です。昨年度お楽しみいただいた方はもちろん、まだご利用いただいたことのない方も、ぜひこの機会に土佐弁特別音声ガイドをご利用ください。

横山 理恵



小学生の頃、学校だか児童館だかで、イベントをしに来てくれた外部の人へメッセージカードを作ったことがある。ただし、より正確に言うならば作られたという方が正しかった。

先生の指示通りに色紙を貼り、指示通りの絵を描く。大人の感性によつて作られたメッセージカードは、人にプレゼントしても問題ないクオリティとなっていた。

カードを渡された外部講師は、それはもう喜んでくれた。良かったと思うと同時に、見ず知らずの子供が作られた拙い品物を渡されて本当に嬉しいのだろうか、子供ながら疑問に感じたものである。

そんな私も今ではすっかり貰う側の人間となった。

当館では教育普及事業の一環として出前教室・出張授業を行っており、県内外の小・中・高等学校へ行き、受講者の学年に合わせて龍馬や近世史の話をしている。

高知県内の小学生に対しては、通常、当館が制作した龍馬の紙芝居やクイズ、それぞれの地域に合わせた歴史の紹介等を行っている。なお、小学校の授業に呼ばれることは意外にも少なく、放課後児童クラブ（学童保育）から夏休み期間中に約一時間の講師を頼まれることが多い。そのため、出前教室は七月～八月に



いただいたメッセージカード

かけて集中して行われている。

児童クラブに通う子供たちの学年はバラバラである。各児童クラブの所属数もあるが、出前教室開催日には約一〇名、多い時には四〇名ほどを相手する。

紙芝居やクイズをしている間は食いつきが良く、ほとんどの子供が聞

き入ってくれるが、地域の歴史の話となると途端に難易度が上がる。低学年が理解できるよう説明をしている間、高学年は退屈そうにしていたり、反対に中学年～高学年向けの説明をすると低学年から「〇〇ってなに？」という質問が飛んだりする。全学年が面白いと感じるような話にするためには場を踏むしかない、そ

う思いながら毎回ウンウン悩みつづ内容を練っている。

ある児童クラブでの帰り際、「係の人は前に出てプレゼントを渡してください」という、先生の言葉と共に、手作りのメッセージカードを持った生徒がしずしずと前に出てきた。受け取ったカードは子供らしい可愛さがありつつ、配置やデザインにセンスを感じる物だった。

経験上、明らかに子供はカードを作らされたのであり、加えてデザイン性の良さからは先生の趣向が見え隠れしている。けれども、先生の口から「プレゼント」という単語が発せられた時から驚きと嬉しさがあり、受け取った時には思わず笑みがこぼれた。

過程はどうであろうと、初めて出会った子の作品であろうと、子供からのプレゼントは貰うと嬉しいものであった。私が子供の頃に会った外部講師も本当に喜んでくれたのかもしれない。帰り道、走る車の中でそう考えながら、長年疑問であった「見ず知らずの子供の制作物プレゼント問題」に終止符を打った。

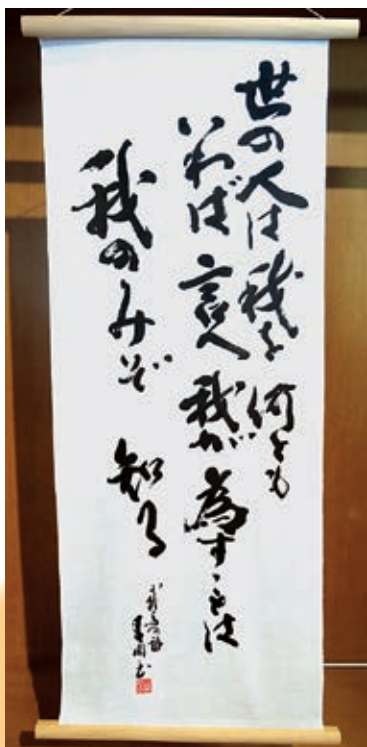
※この文章はプレゼントを催促するものではありません。

※出前教室・出張授業の詳細はHPに載せております。ご希望される場合はお気軽にお問い合わせください。

ミュージアムショップ便り

本館出口に位置するミュージアムショップでは、龍馬に関する様々なグッズをはじめ、年間を通して開催される企画展の商品等を揃えて皆様をお待ちしております。

今回は、どこかで聞いたことが、あるいは目にされたことがあるかもしれない、龍馬の和歌が書かれた“手ぬぐい”の新商品をご紹介します。



「世の人は我を何とも いわば言へ

我が為すことは 我のみぞ 知る」

書：山沖 春蘭



幅35cm長さ90cmの真っ白な日本手拭いには、山沖さんの龍馬を察する流麗な文字が、生き生きと並んでいます。

このオリジナル手ぬぐいをご購入下さったお客様のお声としては、「和歌の文言が前から好き」「この文言に魅かれて」という方が圧倒的に多い中、「剣道をしているので」「鍛冶屋なので仕事で使いたい」という実用派の方。また、「額に入れて飾りたい」「父のお土産にしたい」などがありました。ユニークなお声には「あるミュージシャンの写真集にこの言葉があったので!」と話して下さい方もいました。

それぞれの思いを抱いて“我のみぞ 知る”使い方で、このオリジナル手ぬぐいをご利用になってみてはいかがでしょうか？

まずはミュージアムショップにて、この新商品を是非ご覧ください。



価格：1,500円(税込)

中村 昌代

■「海に見える・ぎやうりい」

「海に見える・ぎやうりい」からは、青々とした海、そこを行きかう船、また左右に視線を移すと、弓なりの海岸線や立ち並ぶ家々などを目にすることができます。「ぎやうりい」や本館屋上は、何かを眺めるのにつけてつけの場所だといえます。

一方で、「ぎやうりい」や屋上を含む本館は、赤と青のコントラスト、ガラス張りが特徴的な建物で、建築学的に関心を持たれる方も多いようです。つまり、眺められる対象でもあるといえるでしょう。

本館を眺める方法はいくつかあります。当たり前ですが、当館に来館すると、東側、正面、西側と間近でじっくりと見るができます。では、もう少し俯瞰してみたい場合はどうでしょうか。

まず、桂浜花街道（県道34号線）を西から東に向かって進むとき、ほぼ正面に目にすることができます。進むごとに徐々に大きくなるその姿は、これから海に漕ぎ出さんとする船そのもののよう感じられます。また、私自身は見たことがないのですが、土佐湾を航行する船上からも眺めることができます。2008年10月、当館にお成りになった高円宮妃久子殿下は、「海から龍馬記念館を見たことがある」との思い出をお話しされたとのことです（「飛騰」第68号掲載、当館HPからも閲覧可能）。航海中に突然現れるシンボリックな建物が印象に残る方も多いかもしれません。

また、先日、高知空港から飛行機に搭乗した際、離陸後すぐにふと窓に目を移すと、浦戸大橋、そして当館の姿を捉えることができました。これまで見上げることではなかった「あの姿」を見下ろしていることに、新鮮な感覚を抱きました。県外からお越しの方で、当館をご存知ない方も、機内から「あの建物はなに？」と気になっ

て検索してくださる方もいらっしゃるでしょう。このように、陸・海・空、それぞれから眺めることができるのです。

「海に見える・ぎやうりい」は眺める場所であり、同時に眺められる場所でもある、そんな当然のことを最近ふと考えました。

安岡 達仁



桂浜花街道から当館を望む

入館状況

2026年9月15日現在

(1991年11月15日 開館以来 34年305日)

◆入館者数 4,934,676人

■リニューアルオープン(2018年4月21日)以来 997,917人

編集後記

「一葉知秋」とは、一枚の葉が落ちる様から秋の訪れに気づく、つまりわずかな前兆や事象から物事の本質や変化を察知することを表しています。日々アンテナを広くして、刻一刻と変化する社会や世界の情勢に乗り遅れないぞ…と大仰なことを思いつつ、もっと身近なところから、これから徐々にやってくる秋らしさを敏感に感じ取り、日々の彩りになりたいと思う今日この頃です。

今月から「土佐ゆかりの刀剣」展が開幕します。「よさこい高知文化祭2026」の関連企画でもある展覧会です。是非ご期待ください。(や)

館だより“飛騰”第139号(年4回発行)表紙題字:書家 沢田 明子氏

〒781-0262 高知市浦戸城山830

TEL (088)841-0001 FAX (088)841-0015

https://ryoma-kinenkan.jp

「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休

入館料 企画展開催時 900円

その他の期間(常設展示室閉室時を含む) 500円
高校生以下無料

高知県・高知市長寿手帳所持者・療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)は無料



「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は140円切手をご希望回数(4回分まで)お送りください。

〒781-0262 高知市浦戸城山830 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読係 まで